
Paradox--4番目の数字--

四月一日皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Paradox - 4番目の数字 -

【著者名】

NO302N

【四月一日】

四月一日

【あらすじ】

あの日、あの夜、俺は全てを奪われた。
その日以来、俺は非日常が嫌いになつた。
当たり前の日常、当たり前の時間、当たり前の世界……
俺はそれを望んでいた。だがいくら光を望もうと闇は容赦なく俺を
引きずり戻す。

まるであの時助けられなかつた少女への贖いを待ちわびているよう
に……

『非日常　過去と未来』（前書き）

初めまして、初投稿の四月一日と書いてワタヌキです。
少し更新が遅れるかもしだせんが皆さんどうぞ気軽に見ていく
ださい。

さて舞台は現代、主人公は非日常が嫌いな現代っ子らしからぬ優等
生です。

基本的にバトルや友情がメインですが時折ラブコメも入れようと思
っています。

不束者ですが宜しくお願ひします。

その日、俺の瞳に映るものは全て燃えていた。

届くはずだったその手には何も無い。

握れたはずだった手を俺は掴めなかつた。

業火という悪魔はかけがえの無いものを全て焼き尽くした。

家も家族も思い出もそして　俺自身もそうなるだらうと思った。

別に生きたいわけではなく、やりたい事があつたわけじゃない。

ただ助けたかつた。

もう一度と握る事は無いと思つたその手の主を

そんな悪魔の一夜から十一年たつた今、俺は何処にもいなかつた。普通に生きて、普通に友達をつくつて、でも心は何処にもない。あの日から全てを失つた俺は生きていると言えるだらうか、何処にも

いない俺はいなくなりたいのかもしれない……。

ただ、今でも残つている。もうどんな声だったのかも思い出せないが

たしかに聞いた、あれ以来脳裏に刻まれたあの　nicht　と
言つ言葉が……。

「アンタ馬鹿あ？」

いきなり目の前の少女が聞き飽きた台詞を言い始めた。

「少なくとも委員長より成績良い筈なんだけど」

登校早々、何故俺が罵倒されているのか。それ以前に何故この女

は俺にばかり絡んでくる？

「誰が成績の事を言つてんのよ？ そりやあんたには一回も勝つしたことないけど」

「じゃあ何の事を言つているんだ、この女は。」

「あんた昨日、四組の仲村さんに告白されたでしょ」

「えつ？ ああ、確かにされたな」

「じゃあ、あなたが彼女にした返事を私にもしてみてくれるかしら」
何でこの女にそんなことをしなくてはならないのかと嫌々に考えたがこの女、一度決めたらは他人の意見を聞かない自己中心な性格だった。

「それはここにいるクラス全員に聞かれてしまうがそれでもしろと？」

「私に気にしないわよ」

この女、本当に首を縦に振りやがった。

「じゃあ、聞かせてくれかしら？ 零くん。あなたのことがずっと好きでした。わたしと付き合つてください」

俺は仕方がないと心でため息を付きながら、彼女の全く心のこもつていな棒読みの台詞に答えた。

「ごめん、俺には心に決めた娘がいるんだ」

「そ、そなうなんだ、それつてもしかして……」

まあ、相変わらずの大根役者っぷりは気にせずに俺は口を開いた。

「うん、昔から好きだったんだ……。ワンニャン動物園のパンダのチーチーが！」

その瞬間、俺の言葉によつて教室が凍りついた。

「初めて彼女を見たのはテレビだった、俺は確信した。この娘こそ運命の娘なんだと。だから君の気持ちは嬉しいよ。でも俺には運命の娘がいるから」

俺は彼女の前で熱演した。朝っぱらから盛り上がりすぎた気はするが言われたとおりにしたからコレで彼女も満足だろう。

委員長の様子を伺うと俺の顔を汚いものを見るよつたときで見ていた。

「昨日さ、その子から相談受けたんだよ。零君が委員長の事、好きかもしないけど告白したって。あたし的にはさ、べつ、別にどうでもよかつたんだけどね」

完璧に演じたはずなのに彼女の眼がつり上がって来ている。

ああ、昨日あの娘が言いかけた人って委員長の事だつたんだ。

俺は心中でそう思った。

「人の趣味にどううつづつもりは無いよ。ただね、どうしても許せないの……」

彼女は大きく息を吸い込むとまるで何かが破裂したように叫びながら、腰を回して俺の懷目掛けで後ろ蹴りをかまってきた。

「このあたしがパンダなんかに負けたことが一番腹が立つのよー。」「うぼうつ！」

あまりにも唐突過ぎることで俺は何が起きたか分からず、目線が上を向き、ドアに投げつけられるように叩き付けられた。

あまりの迫力に横で見ていた男子生徒は腰を抜かすほど腋圧されて椅子から倒れ、女子生徒は彼女に怖気付いてしまった。

「はあ、はあ、わかつた次にあたしを侮辱したら屋上から吊るすわよ」

彼女はそう言うとさつさと自分の席へかえつていった。

俺はというと若干意識がふつ飛んでいて、還つてきたのは現文の北村が教室に入つて来た時だった。

昼休み、俺たちはいつもどおり校舎の屋上で昼食をとることになった。

「しつかし、お前。委員長に喧嘩売るなんて命知らずにも程があるな」

ツレの一人が俺に感心だか哀れみの目で俺に振ってきた。

「別に喧嘩売つてたわけじゃねーよ」

俺は元気のかけらも入っていない抜けた返事を返す。

俺こと霜月零は何処にでもいる普通の高校生であろうとする。

容姿は自分で言うのも何だが人並み以上に整っているだろうと確信していた。髪は少々目元まであり、見えにくいが切る予定はない。クラスでの立ち位置は優等生で成績も常に上位だが別にこれとつた興味もなく、基本的に無気力。

しかしそれでも必要な事だけはしっかり通すから結局、成績も料理も自分に必要な事をやつていたら結果が後から普通についてただけだ。

普通の高校生と違うのは天涯孤獨と言つといろだけだろう。

俺の家族は十一年前、火事で巻き込まれて不幸にも亡くなつた。あの火事以来、非日常が嫌いになつた。健全な高校生なら誰でも憧れるロボットと異世界なんて何が楽しいか全く分からぬ。そんなものは結局大事な物を失うだけなのだ。

だから俺はありのままの日常が大好きだ。これからも普通に好きな人ができ、結婚して子供を儲け、子供たちの為にずっと定年まで働く……それが俺のこれから生き方だと思つ。

「でも委員長と張りえるなんてお前だけだぜ。まあ委員長からしたモテ男のお前のことは良くなは思つていらないんだろうけどな。実際俺もお前のモテ振りにはムカつく」

つか、ただの逆恨みだろ。お前の言い分は、「あつ、そういやさ。例の件どうだつた」

「ん？ 例の件つて何だ？」

俺は連れに惚けるようにして聞いてみる。

「ああ、この前零くんいなかつたけ。実はまた美影学園が生徒募集しているらしいよ」

地味で大人しげの笑顔百点満点の大神君が説明してくれた。

「美影学園つて、あの美影学園？」

美影学園と言えば県内でもトップを誇る有数の進学校で入学費、授業料は無料でおまけに寮も無償で使え、全国で入学希望者数がトップなのだ。おまけに設備も万全で約三千人が学べるほど広さもある。しかも温水プールや野球部専用のドームも設備しているらしい。

「そんな超有名校がうちみたいな貧乏学校の生徒欲しいみたいだよ」「じゃあ、もしかしてお前ら……」

「「「もちろん、先生に売り込んできました」」

はあ、こいつら馬鹿だろ。そう思いながら心の中で俺はその馬鹿さ加減に感心した。

「でもあそこって、何をしてたら入学させてくれるか分かんねーんだろ？」

「まあ、そりなんだよね。実際、隣の高校からも三人くらい入学できたらしいけど一人は頭がいいガリ勉でもう一人は文科系で行けたらしこれど最後の一人は別に頭良い訳じゃないのに受かつたらしいよ」

「へえー」

「絶対そいつ裏金とか使ってるぜ」

「そうだよね」

実はその散々に言われたそいつは俺の友達だつたりするんわけだが、こいつらが知つたらどうなるか。まあ、恐らく怒涛の質問攻めだろうな。

さすがに、これ以上は面倒だと起こしたくないので知らないフリをした。

キーンコーンカーンコーン。

昼休みと言う短い休憩に終わり告げるチャイムが校舎に鳴り響く。「やべつ、次理科室だつけ。実験器具用意しなとかなきやあの吉田が五月蠅いぜ」

俺たちは「ミミを袋に詰めて、教材を取りに行く為に急いで教室へ

戻った。

放課後。

俺は家に帰る為に正門を抜けて、来た道を帰つていく。
氣だるそうに周りを見ても、朝とは違つた通学路には変化もなく
人が流れていくばかりだ。

良かつた。俺はこの日常にいることを静かに実感した。もう関わ
りたくない。

あんな非日常的なことは。

「さあ、かえつてカレーでも作るか」

そう意気込み、スーパーに入ろうとした瞬間。

ボンツ！

背後から鼓膜を破裂させるような爆発音と背中を触るように熱が
風となつて伝わってきた。

振り返ると真後ろにあつたビルから激しい炎が見える。

何だ何だと野次馬がビル周辺へ集まつて、日常が流れていった場は

ガラリと変わつた。

俺は胸が張り裂けそうな気分で、ビルの火災に目を向けた。

たつた今、俺は平凡な日常を確認したばかりなのに 予期せぬ
所で非日常は牙を向いたのだ。

だから、嫌なんだ。

恐らくあの爆発なら誰一人生き残つているはずがない。

俺はしばらくその火を見つめていたが氣分が悪いのでその場から
退散したその時。

「助けて、お母さああん！」

俺はその助けの声に瞬時に振り向き、ビルの三階を見た。
まだ生き残つていてる子供がいたのだ。周囲から更にざわめきが大
きくなつていく。

俺と同じ様にあの爆発では人は助からないと思つていたのだろう
があの子供は確かに生きていた。そして助けを求める声を上げてい
た。

「お前が助けに行けよ！」

「あの火の中じゃいざれ死んじゃうわよ！」

「おい！ 消防車はまだかよ！」

ざわめいていた野次馬はいつの間にか、喧騒で溢れかえつて誰も
動かないでいた。

俺はそんな彼らを見て苛立ちを覚える。

皆日常から抜け出したいと思つているのにいざ非日常が襲つてく
るとすぐこれだ。

「助けて！ 熱いよ！ お兄ちゃん！」

その言葉を聞いた瞬間、何故かはわからないがその場を疾走して
いた。

俺は非日常が嫌いだ。もしこんな場に立ち会つたとしても平然な
顔をして、立ちさらうとずつと思つていた。

でも俺は走つている。

考えるより先に俺の足は燃え盛るビルに向いて走つていた。

周りからは止めておけなどの諦めを呉わせる言葉が飛び交うが俺
はそんな事を聞かずに蛮勇だけでビルへと赴く。

その子供にあの時助ける事ができなかつた妹を被せて……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0302n/>

Paradox--4番目の数字--

2010年10月8日14時45分発行